

## 武蔵野日曜集会

## 我も汝を罪せず

——ヨハネ伝第8章1～11節——

1967年12月3日（武蔵野）

小池辰雄

祈りの場は神の懐 モーセの律法 イエス地に物書き給う 罪なき者まず石をうて 善意志  
 そこで降参したらいい 自己義認 われも汝を罪せじ キリストのどん底の愛 償いかたなき  
 者 愛は多くの罪を掩う 白隠和尚のもらい乳 我々の魂の呼吸がキリストの霊の呼吸と合う  
 即身即主 十字架において実はず投げ出されている自分に気がつく

## 【ヨハネ8:1～11】

1 イエス、オリブ山にゆき給う。2 夜明ごろ、また宮に入りしに、民みな御  
 許に來りたれば、坐して教え給う。3 爰に學者・パリサイ人ら、姦淫のとき捕  
 えられたる女を連れきたり、真中に立ててイエスに言う、4 『師よ、この女は  
 姦淫のおり、そのまま捕えられたるなり。5 モーセは律法に斯る者を石にて撃  
 つべき事を我らに命じたるが、汝は如何に言うか』6 斯く云えるはイエスを試  
 みて訴うる種を得んとてなり。イエス身を屈め、指にて地に物書き給う。7 か  
 れらの問いて止まざれば、イエス身を起して『なんじらの中、罪なき者まず  
 石を擲て』<sup>なげ</sup>と云い、8 また身を屈めて地に物書きたまう。9 彼等これを聞きて  
 良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人一人いでゆき、唯イエスと中  
 に立てる女とのみ遺れり。10 イエス身を起して、女のほかに誰も居らぬを見  
 て言い給う『おんなよ、汝を訴えたる者どもは何処におるぞ、汝を罪する者  
 なきか』11 女いう『主よ、誰もなし』イエス言い給う『われも汝を罪せじ、  
 往け、この後ふたたび罪を犯すな』

## ●祈りの場は神の懐

7章の53節から8章の11節までは、括弧の中に入っている。これは本来、ヨハネ伝の中  
 のものではなくて、別なところから挿入されたというわけで、非常に古い写本にはここが  
 ない。それでは、これはどこからやってきたのかというと、学者は、ルカ伝21章のあとに  
 続いて実はあったという。筆から言いまして、ルカ伝的な筆なんです。ヨハネ伝とは、言  
 葉の使い方や語法やなんかがちがうわけです。ルカ伝21章はどういうところかというのと、  
 終りの方に、



「<sup>37</sup>イエスは昼は宮にて教え、夜は出でてオリブという山に宿りたもう。<sup>38</sup>民はみな御教を聴かんとて、朝とく宮にゆき、御許に集まれり。」(ルカ21・37)

38) と。それで、

「<sup>1</sup>イエス、オリブ山にゆき給う。」

と。各々の人は家に帰つて行つたけれども、イエスはオリブの山に行った。

「<sup>2</sup>夜明けごろ云々」

と言つて、非常に続きがいい。学者の言うとおりでだと思われまます。

それはイエスのエルサレムに入られて、いよいよ過越の祝いを迎えられる直前のことです。十字架がもう近い。夜は出でて、オリブ山のゲッセマネの園へ行つて、祈られた。夜もすがら祈らんがために行かれた。イエスの落ち着くところは祈りの場である。私たちが毎日の生活で、心の合点が祈りの場になつていなければ、まだその信仰は本ものとはいえない。どんなに聖書に明るくてもダメなんです。

「<sup>3</sup>人の子は枕するところがない」

と、キリストは言われましたが、彼の枕するところは実は至る所にある。それは即ち、祈りの場において、父の懐に入ることが彼の枕するところである。そういう意味において、実は朝起きてから夜寝るに至るまで、いや実に夜眠つてるときこそ、最も深く神の懐に居るといふわけでありまます。そういう秘訣が日常生活の中で身につけてくれば、もう

「<sup>4</sup>一切の秘訣を得たり」

ということにだんだん近づいていく。祈りのないところに「一切の秘訣」なんてものはありはしない。

そういう意味において、このヨハネ伝の7章の終りの、

<sup>53</sup> 「<sup>5</sup>斯ておのおの己が家に帰れり。」

の後に、

「<sup>6</sup>イエス、オリブ山にゆき給う。」

とあるのは、何しに行つたかということがすぐピンと来なくてははいかん。山の中、森の中というような、あるいは静かな水のほとりというような所が祈りの場であります。同時にまた、電車の中でどんなに混んでいようと、ひとたび目をつぶれば、即ちそれが自分にとつては密室である。

「<sup>7</sup>戸を閉じて祈れ」

と言うが、目の戸を閉じれば即ち、祈りの世界に入る。もはや、そういう環境に支配されなくなつてくる。

特に祈祷会というのがなければ祈りをしないというようなことでは、それはダメです。祈祷会というのは非常に大事なことです。無教会でも、あるいは一般の教会でも、祈祷会



が非常に貧弱である。祈祷会というところ、集まる人が少ないというようなことが、現にいかにかに祈りが少ないかということ、ある意味において、表わしているところの事態でもありますけれども。問題は、常住坐臥ざがが即ち、祈りの場をいずこにおいても自分でそこに展開することのできる魂であるかどうか。それが問題であります。

## ●モーセの律法

イエスはオリブの山にそのようにして行かれた。

2 夜明ごろ、また宮に入りしに、民みな御許に來りたれば、坐して教え給う。

キリストの言葉はみなこの祈りの中から与えられている言葉である。キリストの業はみな祈りの中から与えられている力である。そうすると、

### 3 爰こゝに学者

即ち、旧約の律法に詳しい教法師たちです。

### パリサイ人ら、

律法を非常に実行しているところの、いわゆる宗教的な道徳的な立派な人たちがパリサイ人です。自ら「分かれたる者」として任じている者がこの「パリサイ人」という。

姦淫のとき捕えられたる女を連れきたり、真中に立ててイエスに言う、<sup>4</sup> 『師よ、この女は姦淫のおり、そのまま捕えられたるなり。』<sup>5</sup> モーセは律法に斯る者を石にて撃つべき事を我らに命じたるが、汝は如何に言うか』<sup>6</sup> 斯く云えるはイエスを試みて訴うる種を得んとてなり。

いかにも、この律法学者やパリサイ人がやりそうなことです。なんとかして、キリストを捕らえる口実をつくろうと思つています。

これは姦淫の現行犯というわけです。申命記の22章を開くと、22章、23章あたりに妙なことがたくさん書いてある。22章23節、

「<sup>23</sup> 処女おとめなる婦人おんなすでに夫に適ゆくの約をなせる後、ある男これに邑まちの内にて遇いてこれを犯さば、汝らその二人を邑の門に曳きいだし石をもてこれを撃ちこゝろすべし。是その女は邑の内にありながら叫ぶことをせざるに因り、またその男はその隣の妻を辱はづかしめたるに因りてなり。汝かく悪事を汝らの中より除くべし。」(申命記22・23)

云々と言つて、たくさんいろんな例がそのあとに書いてあります。レビ記の20章、21章あたりにもずっとそのようなことが書いてある。要するに、姦淫ということが石で撃ち殺されるだけの非常に重罪であるというわけです。死罪に値するという。

当時はローマの治下でありまして、ピラトとか、総督がいるわけです。死罪に当たるものは、これは一応、申し出なくてはいけない。そして、総督の裁きを受けなくてはいけない。ローマの法律では、姦淫はそんなに重くはない。けれども、モーセ律法は非常に重く取り扱つ



ているわけです。

だから、キリストがもし、これを

「石撃ちしてはいかん」

と言え、これはモーセの律法に反することになる。また、

「石撃ちせよ」

ということになると、これは総督の権限を侵すことになる。キリストが「然り」と言おうが、「否」と言おうが、どちらの判断をしても、どこかの網に引っかかるわけです。

「総督のところに行け」

と言え、

「なぜ、モーセの律法に従わないか」

と言う。「殺せ」と言え、政治犯ということになって、今度はキリストが総督のところ引つ張られることになる。そういうジレンマのうちに陥らせようとしてやってきた。実にずるい、狡猾ことうかっな罠にかける。

このパリサイ人というのは、人の悪をことあげしては、なにか貶おとしめたり捕らえたりする。教法師というのは、そういういわゆるパリサイ根性というのが働いている。宗教的・道徳的に自ら任じているようなご連中に、ややもするとそういう角度のクリスチャンの中に、下の人たちを見下すような、すぐ何のかんのと人の悪口を言うような、そういうようなのがこのパリサイ根性というものです。えてして、いわゆる立派という人たちの中にそういうのが非常にあるわけです。

### ● イエス地に物書き給う

そうすると、キリストはどうされたかといいますと、実に珍しいことが書いてある。聖書の他に、キリストの行動にこういう行動はただこころ一つです。何も言わない。もうちゃんと彼らの心をキリストは見抜いていらつしやる。そんな彼らの狡猾な罠には、もうひとつこちらが一段上であります。

#### イエス身を屈かがめ、指にて地に物書き給う。

という。さあ何を書かれたかは、それはもうたくさんさんの学者が註解をしても、どれもこれも、これは本当だろうという、本当の名答案はおそらくないと言っていいかもしれません。非常にサイコロジカルな人がいろいろ考える。

「キリストもちよつとこれは困つたんだらう。なにか難問を問いかけて、答えられないときには、うつむいて紙になにかを書いてみたりするようなことがままあるから、ちよつとそんな具合だつたんだらう」

というような、いかにもまことらしいことを言う。あるいはそうかも知れませんか。心理的にはちよつと穿うがつたような教説であります。もちろん、私も名答はここに出せません。



けれども、いわゆる黙秘権を使うとかいうようなことではない。これは彼らに、とにかく反省を促す。

「お前たち、そんなことを言っているが、そんな問いをかけるが、一体いいのか、そんな問いをかけて」

と。そういう反省を促すようなもので、もうそれは言葉を超えた世界で、キリストはそこに何かしらんが書かれる。図表を書かれたのか、文字を書かれたのか。あるいは、

「汝らのうち罪なき者がまず石を打て」

ということを、読むか読めないような具合に書かれたのかもしれない。私は、ひよつとしたら、そうではないかとも思うんですけれども。とにかく、ちよつと肩すかしを食わせられた。いや、肩すかしどころではない。もつと深刻な不思議な応答をされた。そこには次元の相違があつたわけです。また、決してただ一時的な心境だつたとは思えません。

現行犯で捕まえられた女性を石打とうと、やつきとなつてその悪を暴いてきたけれども、その悪を暴くものはサタンの心です。天使はその人の悪を包む。サタンは人の悪を暴くものである。良きものを拾いだし、悪しきものを包むのが、これが天使の心であります。キリストは、そういう意味において、彼らの汚い裁きの心——これは実はとんでもない偽善であるんですから——それとこの事態に対する深い憐れみの心と、そういうものがここにイエスをして静かに地を見て、そこに無言の言葉を書かした。そういうことだろうと思われます。

### ●罪なき者まず石をうつて

7 かれらの問いて止まざれば、

と。とにかく、彼らはキリストというのを妬んでいるから、何とかしてこれをやつつけなくてはと。イエスは民衆に信望があつて、不思議なことを言ったりしたりしているものだから。しかし、モーセの律法に対してはけしからん、横紙破りだというわけです。それだから、俺たちはいよいよ勝つたなと思つて、問いなじつてきたわけです。

ところが、彼らは本当の投げをくらつた。土俵で、イエスは土俵をわつたかと思つたら、どつこい、彼らは見事に背負い投げをくらわせられるわけです。今度は、何とキリストは起き上がった。

イエス身を起して『なんじらの中、罪なき者まず石を擲て』と言ひ、<sup>8</sup>また身を屈めて地に物書きたもう。

これは権威ある言葉です。「なんじらの中、罪なき者まず石をうて」と、厳然としてキリストは今度は言われる。決してキリストは行き詰まっているのではない。

「お前たちの中で罪のないと思う者は、石をまず打つたらよい」



と。この場合に一番先に石を投げるのは、民の中の長老なんだそうですが。そう言われたら、彼らは自分の良心にこたえた。自分たちの過去を指摘される。

イエスは、あのサマリヤの女の——ヨハネ伝4章で読んだように、あのサマリヤの女もあまり良き女ではありませんが——その素性がちゃんと見えていた。自分の素性を見られたので、サマリヤの女は驚いてしまって、「これは預言者だ」てなわけです。でありますから、キリストにはもちろん、ここに来ていらっしゃるご連中の姿が、内なる姿が見えているわけです。

9 彼等これを聞いて良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人一人いで

ゆき、唯イエスと中に立てる女とのみ遺れり。

なんとというドラマチックな場面でしょうかね。この8章1節から11節は非常に何ともいえないドラマであります。一人びとり逃げて行ってしまった。良心というのは、もし良心がなくなったら、これはもう人間ではない。どんなに悪人であっても、精神的に異常をきたしていない限り、良心はあるわけです。良心の声という。

### ●善意志

カントの『道徳哲学原論』という本の一番先に、

「この世の中にも、またこの世の外にも、絶対無条件に善であるというものは善意志のほかにない」

という有名な言葉がある。「善き意志」は、違った言葉でいうと、良心のことです。善意志は神に通ずる心です。だから、私は、

「万人はこれ宗教人である」

と言うのは、カントの哲学をもつてしても言えることなんです。どんなに実行できなくても、いかに良心の声が確かであって、そして悪しき心がそれを力強く押さえつけて悪いことをしようが、とにかく、良心の声というもの、その響きはあるはずなんです。この響きは神に通ずるところの響きである。だから、万人は良心がある限りみな神の子であり、また、仏の仏性を持っていると仏教の方では言われるわけです。

パウロがローマ書7章で、

「自分の中に善を望むものがあるのだけれども、どうしても悪の法があつて、それと戦つて自分はその悪になかなか勝てない」

と言つて、非常に悩んでいる。このパウロのローマ書7章は実は、万人が問題としてるところの事態である。パウロは本当にローマ書7章をよく書いてくれました。パウロ先生というのはもの凄く意志の強いやつで、すぐキリストに及第したかと思つたら、どっこいそうではない。大使徒パウロがいかに深刻な悩みを持つていたか。

「ああ、われ悩める人なるかな。この死の体からだより我を救わんものは誰ぞ」



と。彼は自分が本当に死んでいるよう人だ、生ける屍体しかばねであると言っている。

善に打ち勝てない。万人が善に打ち勝っているならば、この世の中は問題ない。ところが、善が打ち勝たれてない。物理的には善は勝っています。しかし、本質的には勝っていない。いろいろな規約や律法や何かでとにかく善というものの中に一応、外側は枠にはめられたような歩き方をしているけれども。実は自分の本当の自由をもって善に動いているという人は、我々の一日を省みましても、それだけの本当の自由をもって善に動いているかといったら、

「義人なし、一人だになし」

というのが、信仰しているようがしてしまいが、人間の現実である。それだから、それに本当の本質的な喜び、自由を与えるものはこの信仰を——自分の信仰ではない——キリストの神への信を受けとることによって、その善意志が善なる聖霊という、霊によってこの良心が聖とされていく。問題は結局、その転換ができるかできないかということであります。

●そこで降参したらいい

だから、とにかくこの悪い女を石打とうと大いに義認していた連中がキリストに実はその本質を見抜かれたわけです。

「お前たち、大いに善いようなつもりでこれを石打とうと思っているが、お前たち

はこの女を石打つだけの資格があるか」

と。さすがに、神の子キリストの権威ある宣言であります。キリストでなければ言えない。本当に善意志の勝利者でなければ言えないところの発言であります。まあこれくらいな、きれいな「お面おめん！」というものはない。私は剣道が好きだけでも、これは剣道の素晴らしい見事なお面一本だ。

これにみんなが参ってしまった。参ったら、そこで降参したいらいではないか。しかし、みんな逃げて行ってしまった。これがいかん。ところが、このことを註解者が、私が見たかぎり、ほとんど書いてない。彼らは良心に責められたならば、

「私が悪かった。私たちは悪かった」

と言って、そこでキリストの前に平伏したならば救われる。ところが、逃げたのではこれは救われない。一人も救われない。みんな逃げて行った。

その女だけが救われる。これが、福音の世界を受けるか受けないかの試金石なんです。あるがままの自分をそこに投げ出して平伏するか、体裁をつくらつて弁解するか、逃げていくか。いろいろな程度によって、そういうような三つの在り方がある。弁解をするやつがある。この場合は逃げたのだから、まだ少しはいい方だった。弁解よりは少しはいいけれども、しかし、逃げたつて、弁解したつて、どっちもダメなんだ。

これは、あるがまま自分を平伏してキリストの前に降参すれば、



「お前たち、石打とうと思ったが、そうか、お前たちも分かったか」と言つて、キリストは本当に喜ばれたでしょう。けれども、逃げてしまったんだから、それはしょうがない。逃げてしまつて、また復讐がくる。とうとう復讐してしまつて、キリストを十字架にかけた。その罪は本当に「第二の死」に価いするところの罪だ。

### ●自己義認

イエス身を起して『なんじらの中、罪なき者まず石を擲て』<sup>8</sup>と言ひ、また身を屈めて地に物書きたもう。

「石をなげうて」と言つて、

<sup>8</sup>また身を屈めて地に物書きたもう。

と。「また」と書いてある。キリストはまた、もう彼らをまた見ておられないわけですね、逃げていくさまを。逃げていくさまを見ておられないで、また地にもものを書いている。そうすると、彼らは良心に責められる。権威をもつて、

「お前たちのうちに、打てる者があつたら打つてみる」

と言われて、また身をかがめて書きたもう。二番目の「身を屈めて」がまた深いわけです、前よりも。

これはどういうわけか。偽善者が逃げていく、そんな姿はキリストは見たくはない。キリストはじつとただ大地だけを見ておられる。彼らの偽善は見るにしのびないと。また同時に彼らの心を本当に反省にうながす。そういう非常に深い面が——そればかりではないでしようが——そういう面があつたと私は思います。審く者が審かれてしまう。モーセの律法も、またこの世の道徳の権威も、それもはや問題でない。キリストはその上を出てしまう。彼ら自身がそんなことを言つて訴える資格のない者であることを指摘されましただから、もうイエスの完全なる勝利です。またイエスの完全なる審判です。キリストの審判はそのような審判です。本質を突かれてしまったからどうにもならん。だから、

「汝ら、己がさばく審判にて己もさばかれん」

と、マタイ伝7章に書いてあるとおりです。

「自分の目の梁木を忘れて、人の目のごみを見ているやつがあるか。まず、自分の目から梁木をとり除くべし」

と。「自分の目の梁木」とは自己義認というやつです。己を義しとしていることが罪の最大なるものです。罪というものは、この間違いとか、かの過ちとかいうものではない。罪というものは自己義認です。己を義しとすることが罪の最大なんです。「己を義しとする」というのは、神を無視しているからです。神なしに己を義しとすることは、人間はできるはずのものではない。

だから、キリストは、



「自分は何ものでもない」

と言う。いつも私が申し上げているとおり。自分を無としている。自分をゼロとしている。ゼロとしているから、神さまが本当に100%に入っていきます。

だから、これはキリストの義ではない。

「神の義がその福音のうちに現われた」

ということ。キリストは即ち神の義なのであって、キリスト自身が手放して義でも何でもない。キリストは神の義、キリストは神の愛です。この「神の」をとってしまつたら、キリストというのはありはしない。

「キリストは義人である。愛の深い人である」

なんて、手放して言つたつてダメですよ。そんなのは聖人です。聖人君子であるかもしれないけれども、神の子ではない。

「神の子」というのは、

「自分は何でもない」

というもの。「何でもない」というのが、神の義の具現者であり、神の愛の体現者である。これをまちがえないように。だから、己を義とし己を善とするものは、これは最大の罪なんです。神さまの義をそっちのけにしているのだから。道徳の世界では、神なしにしたら、道徳という世界なら、それはそれでいいでしょう。けれども、これは信仰の世界に入つてみるとダメなんです。

それがルターとエラスムスの真つ向の対立になつたわけです。人文主義的な自由意志、それはそれで結構です。けれども、

「もうひとつ奥の大きな霊的空間の中へ入ってみろ。そうすれば、人文主義的な自由

由なんてものは問題でない。実はそいつはみんな腐っている。自分は本当に自分の自由<sup>に</sup>に死ね。そうすれば、神の自由が入ってくるから」

と。これが「奴隸意志論」とルターが言つたところの事態です。ルターの宗教改革はこの本当の自由を通つたわけです。神の、キリストの自由が、

「御霊のあるところに自由あり」

という、聖霊の自由が彼のところに入った。

そういうわけですから、自己義認<sup>じごぎにん</sup>というやつが罪なんです。「己の目の梁木<sup>うつつぼり</sup>」というのは自己義認<sup>じごぎにん</sup>であります。

●われも汝を罪せじ

9. 彼等これを聞いて良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人一人いで

ゆき、唯イエスと中に立てる女とのみ遺れり。

「お前たちのうちで罪のない者がまず石をなげうて」



と言ったら、みんな逃げて行ってしまった。逃げたのではダメだ。どうぞ、皆さん、逃げるような人にはならないくださいよ。悪かったら、そこにぶつ倒れる。そこにぶつ倒れて、あるがままの自分を投げ出すことが、それが本当の信の世界ですから。なんにも難しいことはない。

10 イエス身を起して、女のほかに誰も居らぬを見て言い給う『おんなよ、汝を訴えたる者どもは何処におるぞ、汝を罪する者なきか』

昔の訳のこの「罪する」は、今は「罰する」という字ですけれども。

「みんなどこに行つてしまったのか、お前を罰する者はなかったのか」

と、新しい訳では書いてある。「一人もいません」と。

11 女いう『主よ、誰もなし』

そうすると、

イエス言い給う『われも汝を罪せじ、往け、この後ふたたび罪を犯すな』

「私もお前を罰しないよ」

と。「私も」と言っている。この「も」が大事なんです。「私は」ではなくて「私も」という。「私もお前を罰しない」と。なぜ、「私も」なんて言われたか。彼らは、罰する者は一人もないが、それでは、私も罰しないと。同じ「罰しない」のだけれども、その「罰しない」の意味がちがう。内容がちがう。キリストは罰せないのではない。罰しようと思えば罰せる人だ。罰する資格のある人なんだ。けれども、「私も罰しない」と。非常にこれは大事な言葉です。

ホゼア書3章を開いてください。

「エホバわれに言給いけるは、汝ふたたび往きてエホバに愛せらるれども転りてほかのもろもろの神にむかい葡萄の菓子を愛するイスラエルの子孫のごとく、そのつれそうものに愛せらるれども姦淫をおこなう婦人を愛せよ。」

旧約聖書のホゼア書は、淫行の妻が罪の子どもを三人もつくってしまった。だから、もちろんそういう妻は捨てていいわけだな。けれども、

「お前はこれを捨てるな」

と、神さまはこの預言者ホゼアに言うんです。

「イスラエルの民は諸々の神々を拜んで、信仰的姦淫を犯している。イスラエルの民は私を本当に神として拜しないで、他の神々を拜して犠牲なんかを献げているのはとんでもない。しかし、そういうイスラエルを私は捨てない。そのことをお前は自分の家庭生活で実践して、それを預言しろ。私の愛はそのような、姦淫を犯してもなおそれを捨てない、どん底の愛なんだ」

ということを、ホゼアの痛い涙の経験をとおしてホゼアに示しているわけです。だから、  
「われ銀十五枚おおむぎ一ホメル半をもてわが為にその婦人をえたり。我こ



れにいいけるは、汝おおくの目わがためにとどまりて淫行をなすことなく他の人にゆくことなかれ、我もまた汝にむかいて然せん。」(ホゼア3:1～2)

という、この一言です。キリストの、

「われも汝を罪せじ」

と通ずる。

「我もまた汝にむかいて然せん」

と。ホゼアは何も悪いことはしなかった。

「お前はもう他の男のところへ行くな。私もそうするよ」

と。「私も他の女のところには行かないよ」と。なにも今まで行ったわけではないけれども、このホゼアは相手の身になって、同じどん底に立って、ものを言っている。

### ●キリストのどん底の愛

これがキリストのどん底の愛と通ずるんです。キリストは罪びとの首となった。彼は私たちの一切の罪を自ら犯したごとくに、自ら犯したごとくにキリストはその場に立って審判を受ける。キリストが十字架の、神さまの審判を受けるといえるのは何事であるか。罪なき者が審判を受けることはひとつもない。けれども、

「汝の罪をすべて私が背負った。だから、お前は無罪放免だ」

というのが十字架でしょうが。死刑執行の死刑囚がその断頭台上で首を刎ねられる寸前に、

「お前はよし。俺が代わって刎ねられるんだ」

と、無罪放免になる。これがキリストの十字架の、罪を全部背負ったところの愛である。

「私もお前を罪しない」

と。「私はお前を罪する資格があるが罪しない」と、そんな理屈を言っているのではない。

「私もお前を罪しない。私がお前の罪をそのまま自分の身に負う」

と。そういうのが、このホゼアに表れたところの深いエホバの神の愛である。それが預言者ホゼアを通しキリストへと向かっていく。ホゼア、エレミヤ、キリスト、ヨハネというような愛の系列です。

「我も汝を罰しない」

と。今日、題に掲げた「我も汝を罪せず」というのは、そのどん底の愛の——ドイツ語の「ミットライデン」というのが本当にその通りです——悩みを共にして、しかもそれを担い上げてしまう。

およそ罪を指摘していきり立っていたやつらとは、その心はまるで天地霄壤しやうじやうの差であります。サタンと神との心の差であります。これが即ち、「我も汝を罪せじ」ということ。

『往け、この後ふたたび罪を犯すな』

と。この姦淫現行犯の女性は完全にこれで救われた。これがマグダラのマリヤであるか誰



であるかは分かりませんが。とにかく、そういうわけです。

### ● 償いかたなき者

この話と思ひ合わされるのはルカ伝7章の――多分この女性かも知れませんか――36節から、

「<sup>37</sup>視よ、この町に罪ある一人の女あり。イエスのパリサイ人の家にて食事の席に居給うを知り、香油（いぶきあぶら）の入りたる石膏の壺を持ちきたり、<sup>38</sup>泣きつつ御足近く後ろにたち、涙にて御足をうるおし、頭の髪にて之を拭（ぬぐ）い、また御足に接吻（くちづけ）して香油を抹（ぬ）れり。<sup>39</sup>イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうちに言う『この人もし預言者ならば触る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪人なるに』<sup>40</sup>イエス答えて言い給う『シモン、我なんじに言うことあり』シモン言う「師よ、言いたまえ」<sup>41</sup>『或る債主（かじめし）に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の負債せしに、<sup>42</sup>償いかたなければ、債主この二人を免（ゆる）せり。されば二人のうち債主を愛することいづれか多き』<sup>43</sup>シモン答えて言う『われ思うに、多く免（ゆる）されたる者ならん』イエス言い給う『なんじの判断は当れり』<sup>44</sup>斯て女の方に振向きてシモンに言い給う『この女を見るか。我なんじの家に入りしに、なんじは我に足の水を与えず、此の女は涙にて我が足を濡らし、頭髮（かみのけ）にて拭（ぬ）えり。<sup>45</sup>なんじは我に接吻（くちづけ）せず、此の女は我が入りし時より、我が足に接吻して止まず。<sup>46</sup>なんじは我が頭に油を抹（ぬ）らず、此の女は我が足に香油を抹（ぬ）れり。<sup>47</sup>この故に我なんじに告ぐ、この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大（おほ）なればなり。赦（ゆる）さるる事の少なき者は、その愛する事もまた少なし』」（ルカ7・37～47）

我々はこの「償いかたなき者」であります。我々は自分の罪を償い方なき者である。どうにもならん。その神に背いている事態、本当に神の意志を意志とすることのできない事態、これが罪の一番根幹であります。そういつた償い方なき者で、そして、いろんなことが起きる。躓（つまず）いたり転んだり滑（すべ）つたりというようなわけです。

今の負債の場合では、「デナリ五十と五百」では十倍です。この罪ある女は本当に多く赦され、そして、キリストに

「多く赦されたから多く愛する」

と言われた。「多く」といつたって何もただ数のことではない。

### ● 愛は多くの罪を掩（おほ）つ

キリストの愛というのは十字架の愛ばかりではない。彼の生涯をとおして、至るところにその愛は表れていて、それが極まったのが十字架の愛である。キリストの愛というのは



みな贖罪的な角度を持つている。私たちがいろいろな生活において、いつも神の前に躓いたり転んだりしては、

「七度を七十倍にしても赦せ」

とキリストが言っておられる。

「自分に悪いことをしたやつを何回赦したらいいんですか」

と聞いたら、キリストは、

「七度を七十倍にしても赦せ」

限りなく赦せ、赦すには限度がないと言う。その代わり、赦されたる者は今度は、限度なく進んで行くわけです。もし、赦しに限度があるならば、進み方にも限度がある。しかし、赦しに限度がないということは、私たちが限りなく神の姿に変えられていく、救われていく、聖化されていく、そのことなんです。ただよしよしと言ってただ赦されて、

「それでは俺はしょっちゅう赦されるのだから、勝手なことをしよう」

なんて、そんな者は地獄に行く。赦されることの、赦しの深い愛を感じれば感ずるほど、いよいよ高く神の方へ昇っていく。深く赦されれば赦されるほど高く上げられていく。

そのように、その人のどん底に立って、

「愛は多くの罪を掩う」

と、ペテロ前書の4章に書いてある。「掩う」というのは、蓋をかぶせる意味ですからね、そんなものはない。7節に、

「7万の物のおわり近づけり。然れば汝ら心を確かにし、慎みて祈りせよ。

8 何事よりも先ず互いに熱く相愛せよ。愛は多くの罪を掩えばなり。」(ペテロ

前書4:7-8)

という。

贖罪所の上には天使が翼でもって被っている姿があるわけです。さっき言った、天使は包む方ですね。包んでしまう。キリストの愛は被って、その罪の事態をだんだん変質変貌して純化するわけです。聖化する。キリストの赦しにはそういうプラスの力を持っている。赦しの愛は、それを逆に純化し聖化し、また本当の愛に化する力を持っている。

それは即ち、神の愛が聖霊によって注がれてくると、ローマ書5章5節に書いてあるとおり、キリストの霊が注がれてくるわけです。十字架において赦されるということだけではない。さきほどの讚美歌の中にも、

「生命を受けよ」

という言葉がありましたけれども、復活の生命が来て、キリストの霊の血が輸血されてくる。私たちが霊的に変えられていくわけです。



## ●白隠和尚のもらい乳

いつか白隠和尚の伝記を読んだときに、こういうことが書いてあった。遠州の原町という所に松陰寺というお寺がありまして、そこに白隠和尚がいたことがある。まだ白隠とは言わない時代でした。そうしたら、白隠和尚を非常に慕って幾人かの人たちが集まってきた。その中に金持ちの商人がいて、和尚さんの教えをしつかり受けて尊敬していた。その娘さんがちよつとお腹が大きくなった。それで親父さんに責められた。

「お前は子どもなんか宿してどうしたのだ」

と。そうしたら、その娘は実際の相手を隠して、

「実は白隠さんが相手なんです」

と。それで、この坊主はけしからんというわけで、子どもが生れたときに、その赤ん坊を連れて行って、

「これはお前の子ではないか、こんなものは育てるわけにいかん」

と、罵り<sup>ののし</sup>なじつて、捨てるようにして置いた。白隠は、

「そうだったかね、そんなこともあったかもしれない」

なんて言つて、受けとつた。白隠は深い涙をたたえたと書いてありますが。それで育てるのに困つて、托鉢にまた出かけた。もらい乳をして、とうとう一年間育てた。しかし、評判がすっかりたつてしまったものだから、どんだん弟子たちは去つて行つた。俺たちの先生はダメなやつだと。それで、一年もした頃の朝に、あいかわらず托鉢して、もらい乳をして歩いていた。その姿を見て、その娘さんはさすがに良心に責められた。

「自分は悪かった。本当は白隠さんではなかった。自分のところの雇い人とのまちがいでできた子でした」

と、お父さんにとつとう白状した。

「実は、白隠さんをお父さんが信頼しているから、いいと思つてそう言つたんです」

と。それで、お父さんは

「そうだったか」

と。それで、白隠のところに出かけて行って、平身低頭謝つた。

「あんたは本当の坊さんだ。私はとんでもない思い違いをして、悪いことを皆に言いつつていふらして申し訳なかった」

と、涙を流して詫びた。そういうことで、しかし、逆に白隠の白隠たる本質が表れたわけです。即ち、この場合の白隠は、その娘の罪を全部、自分が背負っている。また過ちを犯した人をも背負っている。本当にそれを助けてやろうと。それがこのキリストの心とあい通ずるものであります。さすがに昔の一流の坊さんは素晴らしかったと、私が言いたいのは、そういうこともひとつの例でありますけれども。

白隠のちよつとおどけたような歌がある。



「恋人は雲の上なるお富士さん晴れて遭う日は雪の肌見る」

と。白隠は富士山が好きなんだ。「白隠」という彼の号は、白雲で隠されている富士山からきている。だから、自分はあるの富士山のようなものでありたい。雲に隠れていようが、そこは本当に真白き姿であると。自分の恋人は富士山で、雲の上なるお富士さん晴れて遭う日は雪の肌見ると。

「お富士さん霞の小袖を脱がしやんせ雪の肌が見とうござんす」

(お富士さん小袖の霞をぬぎやしやんせ玉のお肌が見とうござんす)

なんていう歌もある(笑)。そこらに日本の坊さんたちの何ともいえない素晴らしい心境がある。

### ●我々の魂の呼吸がキリストの霊の呼吸と合う

そういった、どのようなことに処しても、どのような事態にぶつかっても、時間空間を本当に乗り越え、また環境や運命を乗り越えた、本当の在り方がそこにとれる。このヨハネ伝8章の1節から8節は、私は非常に好きなのところのひとつでありますけれども。そのような、もう相對の世界をぶち超えたところの、本当の愛が最も力強いということがこれで分かるわけです。もう何とか主義とか、そんなことを言っているうちはまだまだダメなんです。イデオロギーなんていうものはどうでもいいですから。

しかしながら、そこにおいてこそ本当の

「我は道なり。我は真理なり。我は生命なり」

というこのキリスト。そういうキリストの霊にこちらの呼吸が合うような、そういう魂に私たちはなっていかなければ、「信仰、信仰」なんて言ったって、そんなものは煙みみたいなものです。我々の霊の呼吸が、魂の呼吸が、キリストの霊の呼吸と合うような、それが聖霊を本当にうちに宿すこと。あるがままの自分を常に投げ出しているところの人がそういうことになってくる。クリスマスではないですよ。

私たちは、人の在り方、外側の在り方でもつてどうのこうのと言っているうちはまだです。大事なことは内側の在り方です。内側の在り方は即ち、本当の信の事態です。道徳も問題ではない。まだ、人の不道徳だとか、道徳なんてことを問題としている人は結局、自分がそういう人なんです。もうひとつ奥の世界に入りますと、霊の世界に入ると、それは信の世界です。信のことに對しては本当に自分に対しても非常に厳かわじそで厳きびしくなければいけません。本当に真理即ち、キリストと、一つであるかどうかということ。即、の世界です。

### ●即身即主

「即身即主」とこないだ曠愛新書の第6号(「キリスト道」)に書いたが、あんなのは時々読み返してくださいよ。大事な文ですから。



「この身(このまま)主に即する」

ということとは一番内的な現実のことを言っている。私たちの外側の現実が主に即するのは、これは地上ではいかない。けれども、内的な一番中核のところでは、即身、即主という質を持つか持たないか。このことに対しては本当に厳しくなくてはいかん。その点で本当にキリストに即する。

「あいかわらず私はそこにとくにズレがあります」

と、みな私たちは言わざるをえない。けれども、自他ともにそんなことを問題にしても始まらない。

人によって、非常に意志的に強い人も、知的な人も、道徳的な人も、いろいろあります。一人びとりのそれぞれの在り方、性質、賜ったものはさまざまです。けれども、一番中心においてはやはりみな一つである。それがどのようにその人において表れるかということだけは、その人その人において、ちょうど花はいろんな花があるように、現象面は違ってくるだけのほなしです。

どうぞ、お互いにその即の世界を生きて、その即の世界では、一つだと。

「どのようなことがあっても、私はキリストの本願で生きている。それが私の生命です。キリストの霊が私の生命ですよ」

ということが、はらわたの底から言えるクリスチャンであるならば、お互いに本当に信頼していくことができる。どんどん乗り越えていくことができる。互いに許し、互いに忍び、包む。そして、その人たちが互いに本当に光を発していくようになっていく。そういうことが普通の道徳の世界ではとうてい考えられないところの、もうひとつ奥の素晴らしい世界なんです。道徳の世界でいくら辻褄を合わせたって結局ダメです。あるいは、いわゆる信仰の世界でもダメです。いわゆる宗派争いになる。

### ●十字架において実は投げ出されている自分に気がつく

そういうことで、この福音の一番深いどんだ底の事態が、このヨハネ伝8章1節から8節のドラマの中に表れている。完全にこの女性は救われてしまった。そして、それがおそらくマグダラのマリヤではないかと思われるくらいなのですが、これが最も、他の弟子たちがキリストを去ったときに、実は一番キリストに近くあった。最初に復活のキリストにでっくわしたのが彼女である。また、十字架上の盗賊が真っ先にキリストと共にパラダイスに入ってしまった。これみな、自分を本当にあるがままに投げ出したその人たちが最も救われた。

パウロはいきり立ってパリサイ人の急先鋒だった。しかし、彼はとにかく熱心だったものだから、キリストが、

「あの熱心は、しかし、とんでもない。自己に執した熱心だから。あの熱心を180度



に方向転換、変質させなければいかん」

というのが、とうとう復活のキリストがダマスト途上でパウロを一撃したところの事態だった。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」

と。それでサウロはひっくり返されて、

「参った!」

と。もう完全に自分の義をかなぐり捨てて、キリストの義に生きる人間となった。

とにかく、どのみちにしたところで、一番根底的にはこの神の義そのものであるところのキリスト。神の愛そのものであるところの――この愛と義とは離すことはできません――キリストに自分の魂が投げ出されること。十字架において実は投げ出されている自分に気がつくということによって本当に投げ出されるわけです。

「汝、既に救われたり。ゆえに、いよいよ救われる」

というだけのなし。

「救われるために来い」

というのではない。もう救われているんです、皆さんは。だから、聖霊は、その救われている事態を受けとれば、必ずやってくるんです。

今の青年諸君が、今こそ一番深いこの世界に――ヒルテも言っているとおおり、

「20世紀は深みの次元が失われた次元である」

というが――深みの次元にあなた方が本当に入らなくては。今の青年は、別なことばかり考えている。小学校からの教育がそもそも非常に偏している。縦の線を忘れて、横の線ばかりやっている。

アブラハムが天使に、

「もし、五人の義人がいれば、この町を赦してくれるか」

と聞いたが、最後は本当は一人なんです。

「もし、一人でもいいれば、赦してくれるか」

と。実に最後の一人で神さまは人類を赦した。キリストという最後の一人でこの赦しが来たんです。それで、神との連なりが、万人救済の道が開かれた。もはや、ひとごとではない。魂はその素晴らしい世界に本当に入るまでは、大歓喜の世界に入らないようにできているのだから。

皆さん、どうぞ、大胆率直にこの世界に入ってください。ではおしまい。

